

備品の所在を知る男と、機械の技術を持つ男。お互いの能力に気づき

諦めず協力し小型宇宙船を修理し地表に生還したという逸話もある。



何年か未来の話を少しだけしてみる

「最たる幻想」がコンセプトの宇宙リゾート施設「ウイステリア」。営業開始まであと一ヶ月。史上初のプロジェクトにも関わらず設計から建造座標までがスピード決定され、完成までの全行程に一切の乱れなく、直線的な具現化がなされた。「ウイステリア」とは「藤」の意。宿泊客室を守るデブリ防護板の連なりが藤を連想させることに由来する。胴体部に各施設、枝先に宿泊客室120基。



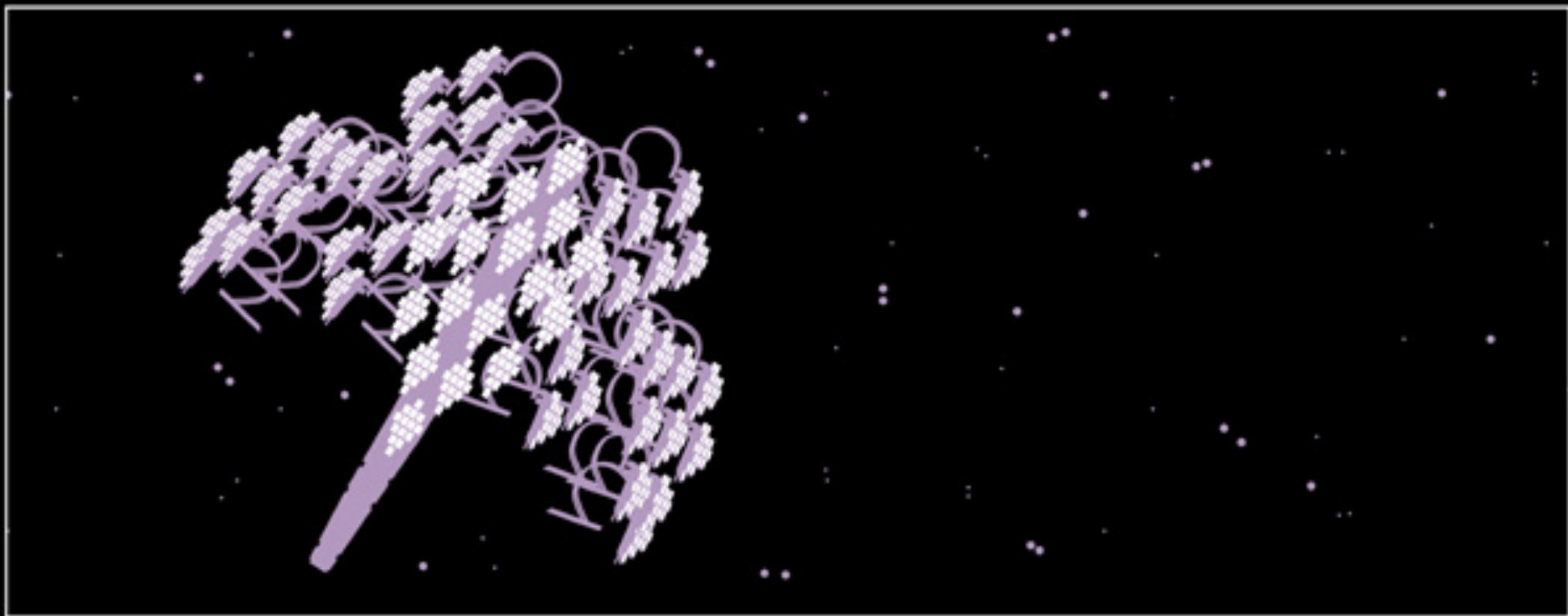
宿泊客室群



デブリ保護板の裏に客室ドーム



宿泊客室と胴体部を結ぶ通路の構造は外部衝撃を分散する。客室は最大十二人まで宿泊可能。商業施設にはプール、庭園も。客室ランクは四段階。ルーム数や備品のグレードに違いがある。胴体部分までの移動は専用エレベーターで一分。特別事態時のみ徒歩でも移動可能。



胴体部は三つのエリアに大別。施設エリア、緑化エリア、商店街エリア。四季シフトというものがあり、豊かな気候も再現。季節別商品やイベント、草木の色彩なども楽しめる。



移設エリア



緑化エリア



商店街エリア

最たる幻想ウイステリア。構造維持の要となる数値のゆらぎは息吹を感じさせる。

藤の花の程度のゆらぎも美しさのうち。だがこれは花ではなく人工建造物。

最たる幻想ウイステリア。いろんな矛盾が調和したかのような不自然な理論が成り立たせている。



不自然で矛盾しているが結果的に成り立つ不思議さ。

いわば不自然な調和。最たる幻想という名のゆえんでもあるという。

不自然な調和?なぜか気にかかる。完璧なはずなのに何かがある...



登場人物(1 / 3) 備品倉庫点検の男性
視力の低さそのままに生きて教養と知識は縁遠いが、知性と気品は持っている。しかし世界をぼやけたものとしてとらえているせいか、自然欲求を許される最低限の範囲で満たすこと以外に興味がない。女性の香りがしてもそれを女性のものかどうかすら確認できないので、そのまま遠ざかり取り逃がす。ヘルメット、軍手、作業着、作業靴、いつも同じ格好。休日と平日の違いはヘルメットと軍手がないことだけ。



遠くが見えなくて

周りを見渡す必要を感じなくなってから
いつも下を向くようになった

世界がぼやけて見えることで欲は拡大せず 最低限の衣食住で解決した

そのため世界に気が散らされず 彼独自の世界観は確固となっていた



安定した無欲というより消極性 眼鏡をかける最低限の向上心もない

だが知性と気品ある彼はいつか気がつくだろう 必要なのは電撃だけ


登場人物(2 / 3) 機械技師の男性



彼には突出したところがない。冗談や憎まれ口もふつうに聞かせる。友人の話もふつうに聞く。食べる量もそれなりにふつうだし、運動も、ふつうに好き。だがそういうふつうさと、人物的なふつうさは、また違う。彼にだって非凡なところはある。たとえば心優しさと厳しさが同居する点。ときに勇気や誠意を発揮する点。なかなかできないこと。自分が選り好みしたことだけをこなして、他はおろそか、という人はいくらでもいるが、彼は違った。彼はふつうだが、すべてをふつうにこなせる点が非凡だった。

ウイステリアの商店街エリアには六十二台の電子掲示板が設置されている。その調整は二人でやれば確かに楽だが一人でじゅうぶん間に合う仕事。





電子掲示板ひとつひとつの機能チェックを慣れた手つきで素早く確実にこなせば、残り時間は営業開始前のウイステリア内部を下見する楽しみもゆるされる。

彼はこの仕事が得意なわけじゃない。ただ仕事だからやっている。指示どおりにこなし、指示に不備あれば補う機転もきかせた。

ふつうにこなすだけだがそれは水準以上を保っていた。彼は仕事以外でもふつうだった。誰に対しても目下目上なく接した。彼は平均的であろうとバランス取りしなかった。だがなぜ自分がそうなのかを彼は自覚していない。それが彼の弱点。

彼はここまでただふつうに生きてこれた。自分を見失って平均を追いかけることと、自分としてのふつうを生きることは、似て非なるもの。彼はそれを体現していた。だからバランス取りをしない。むしろ彼はすべてが好きだった。

好き嫌いもない、つまらない男だった。でもなぜそうなのかを知らない。いたってふつう。であるがゆえに、ふつうに彼はいつか気がつくだろう、必要なのは電撃だけ。



登場人物(3 / 3) 地方雑誌社の女性

商店街エリアの出店はウイステリアのコンセプトを崩さない特異さを持たずそれでいて最たる幻想という空間にマッチしどのくらい売上を出せるかは最重要だが各種ブランド以外に

商店街エリアのマップが完成した。その最終チェックに彼女その仕事は各店舗を見てまわるだけという楽なものだった

こんな抽選に当選してしまうと舞い上がり勘違いをして彼女はそんなことなく幻想を楽しめる人であり適任だが

ものだけがゆるされている。かつそれを阻害しないもの。新しい挑戦に挑む店舗もいくつか。

が派遣された。抽選の結果だった。が幻想を好意的にとらえる楽観さが必要だった。

きゅうに評論家になって偉そうに毒舌ぶる人もいる。じつは人生自体に甘い幻想を持つ幼さがあった。



かたくりしい仕事じゃない。



そんな仕事でも重圧から手と膝が震えた。
この会社に入るまで働いたことがなかった。
たぶんどんな仕事でもやはり震えただろう。

友人は「うらやましい」と言った。
母親は「よかったね」と言った。
父親は「楽しんできなさい」と言った。
上司や同僚は「適任だね」と言った。
だが彼女はそんな彼らを恨んだ。



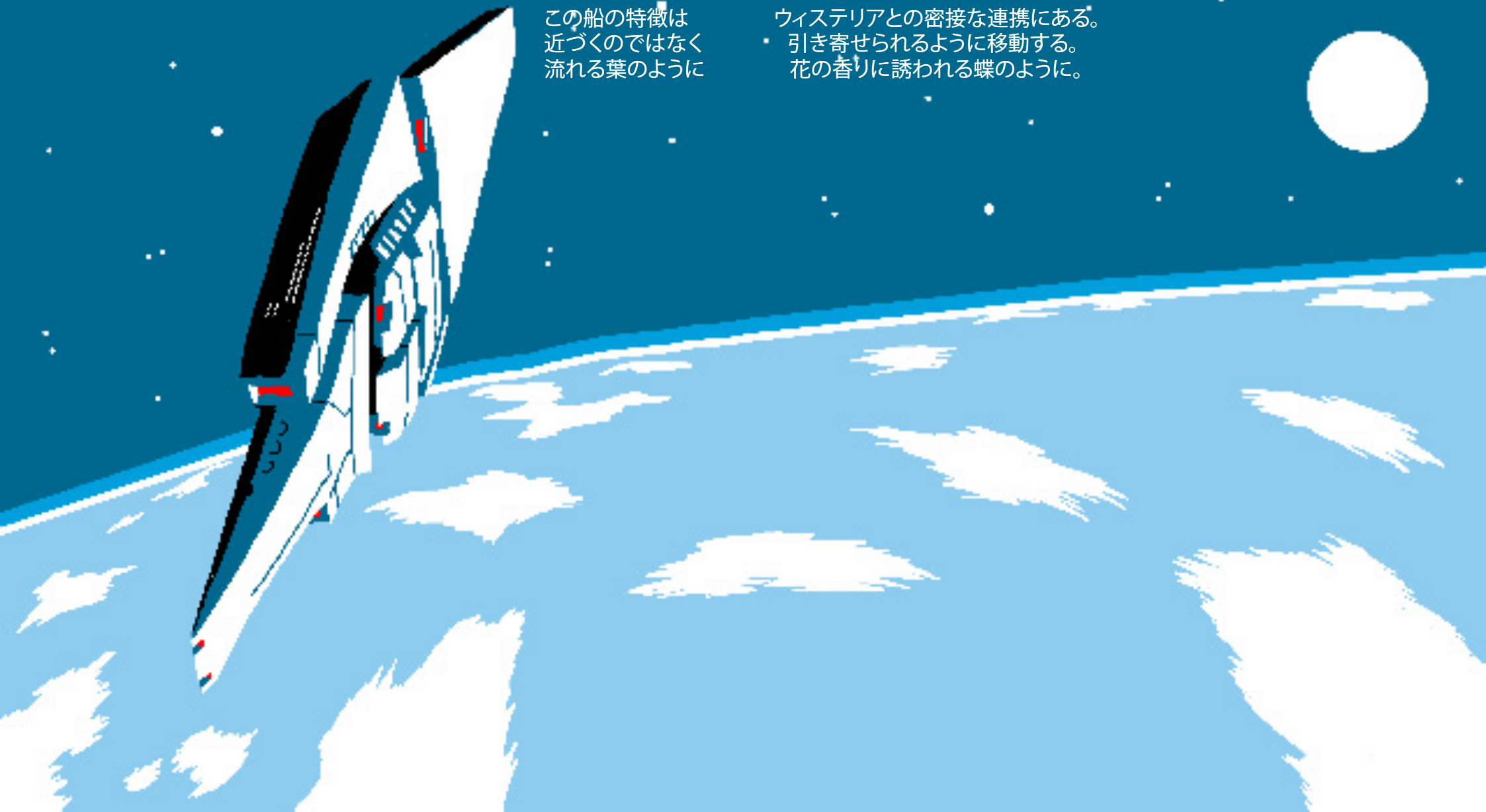
「なぜ私を選んだの？」不安から誰かを恨んだ。嫌なことは逃げてきた。
この仕事に必要な重箱の隅をつつく人並みの細やかさも育っていない。
それでも彼女なりに「これは遊びの延長」と考えて気持ちを切り替えた。

ウイステリア連絡船

宇宙船の画期的な自動制御法が発明されたことで、こうした中型の宇宙船なら乗組員一名で足りるようになった。実際は船内売店や清掃を考えれば四人ほど必要だが、航行のみなら一名という意味。

この船の特徴は
近づくのではなく
流れる葉のように

ウイステリアとの密接な連携にある。
引き寄せられるように移動する。
花の香りに誘われる蝶のように。



そう、到着までの静寂を・・・



たった一名の乗組員には席を探して歩き回る三人の姿が想像できた。

他に乗客がないからチケットの席番号に従うことを迷ってますね。どこに座ってもいいです。あなたたちはお互いに一言も交わさず黙って目的地まで行くでしょう。私も黙っています。この船がどれだけ静かに動くかを感じられますよ。





三人の乗客がウイステリアに降り立った。一ヶ月後はごったがえす。こんなに静かにはいかないだろう。



彼が乗組員に選ばれたのは知人の紹介によるものが大きかった。感謝すべきこと。



これまでの仕事のなかでも楽で給料も高い。しかし永遠ではない。昔の苦労は忘れずにおきたいもの。



そういうことを一度忘れると思出すまでには時間がかかる。彼は忘れかけそうな気がしていた。



彼には胸騒ぎがあった。なにかが気になる。仕事の緊張のせいだと思った。ウイステリアの幻想に麻痺して気づけば居眠りしていた。



彼はどこかでうっすらとウイステリアの幻想の危険さに気づいていた。だがそのこと自体には気づかない。むしろ眠らされてしまった。



気づくことを忘れた、ということに気づくには、どうすればいい？たぶん、気づかさなくてはならない。



気づかせるようなことが起きようとしていた。はやく気づくべきだが彼はまだウイステリアの偉大な幻想の力に眠らされていた。

エラー 8 8 2。それはウイステリアの構造を保つゆらぎが頻繁に起こすエラー。完璧な調和に雑音はつきもの。雑音がなければ死んでいるも同じ。



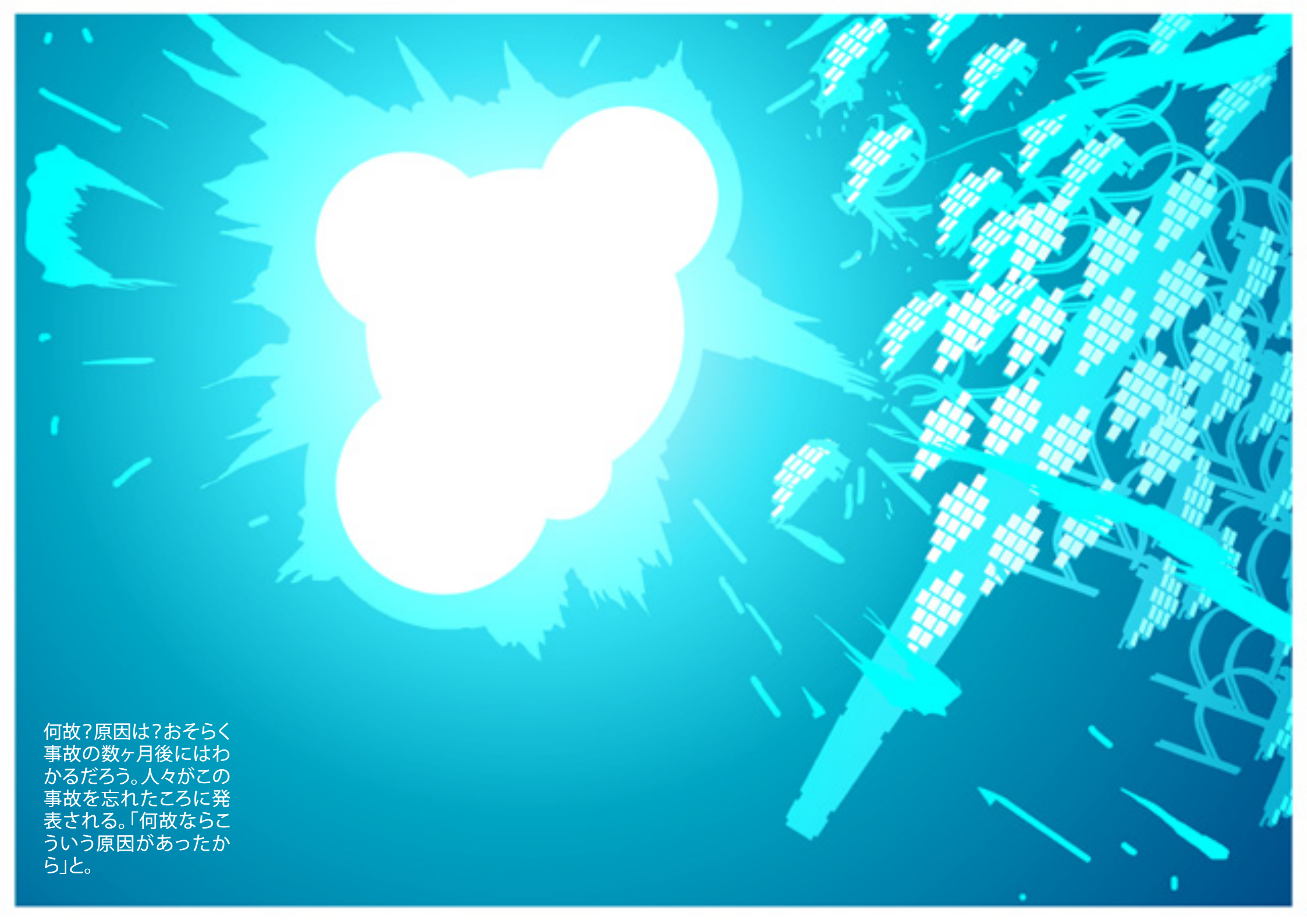
今回はいつもと違った。その数が通常の200倍だった。彼の心臓が一度だけ大きく脈打った。さらに次は400倍となった。彼の目が恐怖で硬直した。





ゆらぎの増幅は大きな電撃を産んだ。多くの人たちが共に目指して夢見た幻想がその可能性を無視させた。

あの二人にとって十分な電撃がほとばしった。乗組員は脱出カプセルで脱出できた。あの三人はもう船から降りた後だから大丈夫だろうと。

A stylized illustration of a city skyline with a large, glowing, multi-lobed shape in the sky, possibly representing a disaster or a significant event. The city is depicted with various building shapes and colors, including red, yellow, and blue. The sky is a deep blue with a large, glowing, multi-lobed shape in the center, surrounded by a bright yellow and orange glow. The overall style is graphic and modern.

何故?原因は?おそらく
事故の数ヶ月後にはわ
かるだろう。人々がこの
事故を忘れたところに発
表される。「何故ならこ
ういう原因があったか
ら」と。

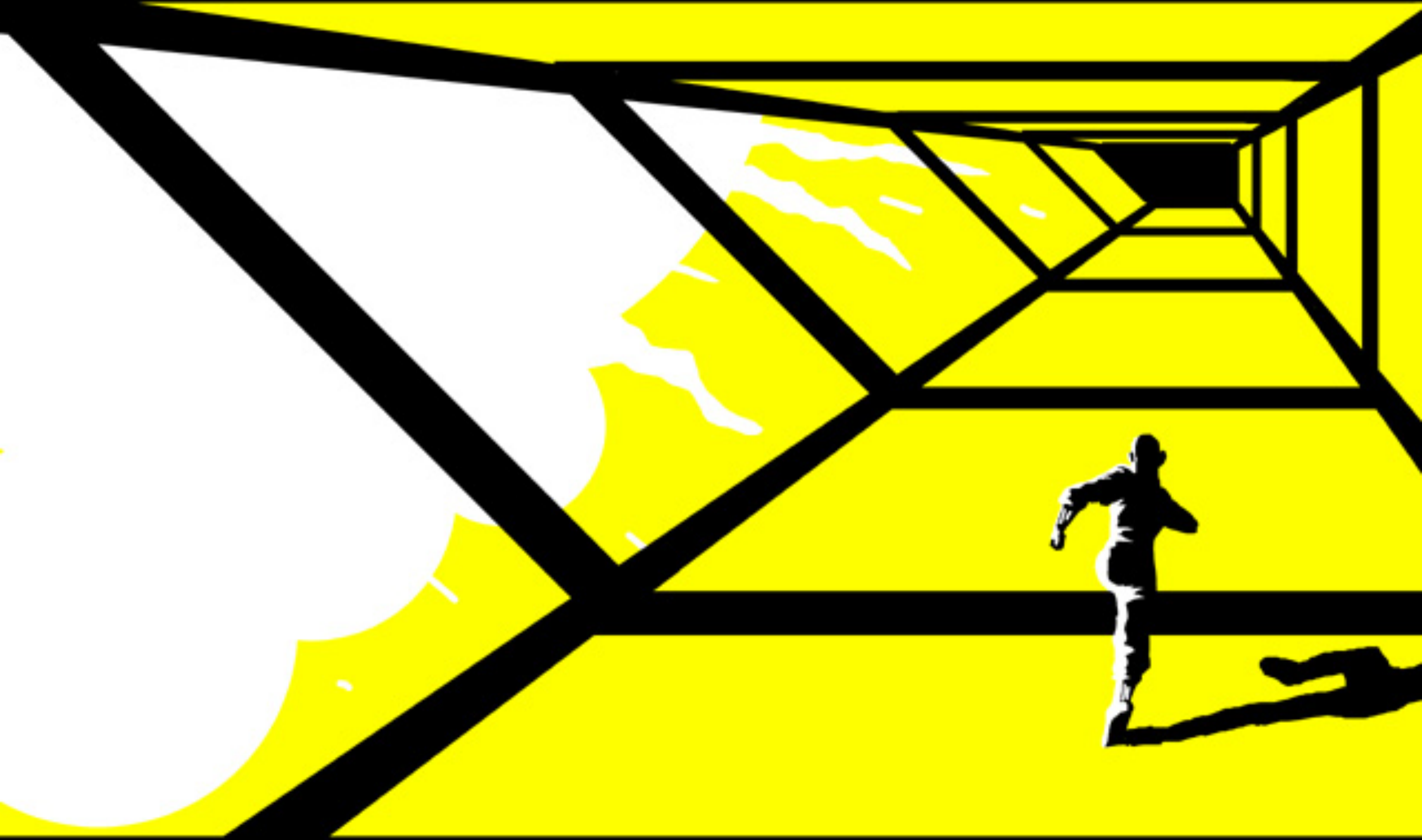


光と熱が肌を刺した。刺してきた方角へ顔を向けたまま硬直した。太陽のような光球。流星のような燃え飛ぶ破片。雷雲のとどろきのようにきしむ衝撃。四方八方から。生まれて初めて感じる方向からも。それまでは自分が世界の中心だと思っていた。

商店街エリアの電子掲示板は各店舗の近くに設置されている。備品倉庫は各店舗の最短距離となる中心部に位置している。



発生 ただちに避難してください 緊急事態発生 ただちに避難してください 緊急事態発生 ただちに避難してください 緊急事態発生 ただちに避難してください



脱出船 起動完了台数: 1 / 2000 1999台が破損により起動できませんでした 脱出船 起動完了台数: 1 / 2000 1999台が破損により起動でき

■ 543/2000



■ 541/2000



■ 540/2000



■ 542/2000



■ 544/2000



緊急事態の
いうには
脱出船に

アナウンスが
ここへ来て
乗れという。



よく見えない
動いている。
そういえば

なにかが
あれは人だ。
俺以外にもいた。



すると次には
司令が来た。
信頼している。
世界において

アナウンス以外にも
俺はこの指令を
このぼやけた
ただひとつ確かなもの。



拾いなおすというのはまず何も予想できてない時だ。必ず最初にどこかで拾い、ここまで来たなら不要と思い、一度は捨てる。だが予想外なことが起きて、拾いなおす……。拾ったのは、このときのためだったのか？そんなつもりじゃなかった。

では拾わなかったものは？予想はした。だがまさかと樂觀した。ふつうに走って来た。そして出会う。息を荒げたまま棒立ち。だが正しいのはどちらかを即座に考えた。

考えないものは第一の指令に従うだけ。まるで子供が親のいいつけを守るように。

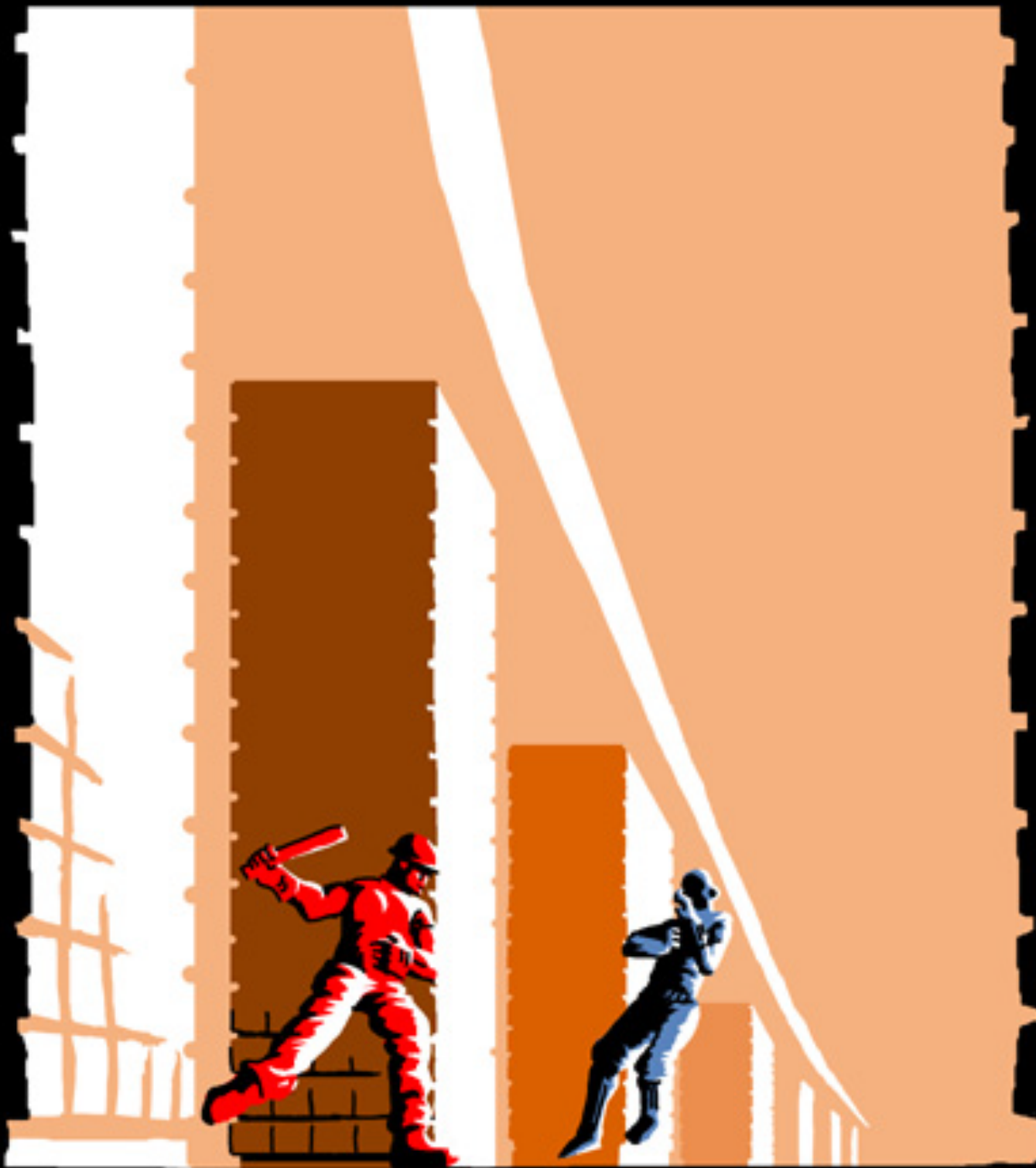
両者の姿勢はどちらも答えを出すには不足している。電撃が必要だった。

脱出船の発射口近く。男はもう一人の男を見るやいなやパイプを拾いなおした。もう一人はどうすれば二人とも助かるかを考えているが同意は得られないだろう。






商店街エリアには脱出船の発射口への通路が四つある。どの通路からでも全船が並ぶ発射口に通じている。



弱者は戦えない。だから隠れて冷静になり状況を見つめることができる。漁夫の利という言葉もある。だがいつもそのようにして待てるか？もう時間がないとしたら？ちなみに共倒れという言葉もある。心細く、動悸は激しく、口は震えだし、目は見開かれ、そういうことに全力をもってゆかれるとしたら？おそらく下腹部はゆるみ力が入らず、手はだらりと垂れ下がり、視線は足元ばかりへ、だろう。それがなくても、漁夫の利へと走りきる体力もないとしたら？曲線のついた白樺のようになることばかり考えて来たとしたら？



こう着状態は
意思の疎通を産
みやすい。お互
い疲れ切ればそ
の可能性は高ま
る。


虚しさのあと
に、共感。だが
勝利を譲る美德
は困難で、勇気
が必要。

しかしそれが
答えなのか？勝
ち負けなく、両
者を負かすよう
な答えはないの
か？

戦えない三人
目は、戦う両者
に意思の疎通を
感じた時、必ず
しも戦うことが
参加条件ではな
いと気づく。

でもまだ頭の
中は真っ白。ふ
と足がふらつき
身は前に投げ出
され、三人目が
その場にあらわ
れた。





彼女には電撃は
なぜなら彼女が
二人の男はその

光に照らされた
人間というのは
だがそれでも男と

これでそが待つて
電撃のように二人

必要なかった。
電撃そのものだったから。
第三者を見た。

なめらかな絶望の表情。
そう大差ない。
女は山ほど違う。

いた答え。
の胸を貫いた。



A stylized illustration of a red pencil with white text on its body, set against a black background with red and white circular patterns. The pencil is oriented horizontally, with the text 'なんという美談、' on the left and '勇気、犠牲・・・だろうか？' on the right. The background features a large red shape on the left with several white circles of varying sizes, and several smaller red circles with white centers scattered across the black field.

なんという美談、

勇気、犠牲・・・だろうか？



二人のうちどちらが選ばれるのだろうか？どちらも選ばれなかった。そのかわり二人の男は種子を彼女に託した。あとは彼女の母なる力がどちらの種子かを選ぶ。誰かが選んでくれるという幻想がウイステリアの悲劇を産み出した。彼女は生還する。種子は芽を出すだろうか？結論を書いておこう、芽は出なかった。彼女は安堵した。だが時が経つにつれ、悲しみがおそう。二人の男性の故郷へ旅をする。彼らの幼少時代、友人、両親、家族、どんな想いで種子を託したのか。どんな愛があつて。ひとつ知るたび涙する。そうして旅を終えた何年か後に流星のような幸せをつかむ。そのときの彼女の姿が眼に浮かぶようだ。何年か未来の話を少しだけしてみた。

THE END